

RISTと歩いた青春 ~私的歴史~

RIST幹事
熊本大学 教授
松永 信智



平成も今年で終わりです。皆様はRISTとの俯瞰的なお話をされると思うので、ここでは「私的歴史」についてお話したいと思います。

RISTと出会ったのはオートメーションで有名な企業に就職して数年後です。恩師の川路会長からスイカロボットの絵を書いて欲しいと言われ、某タイマーマーカーみたいなキャラクターを書いたのが初めての出会いでした。その後、テーマは「工程適応型フレキシブルロボット技術に関する研究開発」に発展し、正式のテーマの企業メンバとして参画しました。素晴らしい成果を上げ平田機工、櫻井精技は自社製品に応用しました。これはRISTの初期の代表的な事業化テーマです。

その約5年後、思い掛けず大学の准教授となりました。RISTの事業化テーマはこの頃から、初期のオートメーションから医工連携や農工連携へ変わりつつありました。川路会長と櫻井精技の櫻井社長が大学発ベンチャーを作るので「使いやすいCPM（骨折者のリハビリに使用する装置）を作れ」と厳命をうけました。医師との協業や薬事法など、医工連携は異世界のもの作りでした。またその頃、テイラーズ（現ユニバーサリー電工）とこれまた初めての農工連携が始まりました。中川社長はハウスロボとジェットファンと新しい農業用ヒーターを使って今までにない精度でビニールハウス内の温度制御を実現することができました。

その後RISTは村山会長の時代になりました。その頃サンワハイテックの山下社長と出会い電動車椅子STAViの開発を開始しました。この特徴は、デ

ザイン主導型の商品開発です。山下社長は崇城大学の飯田先生にデザインをお願いし、3号機まで斬新なデザインで作りあげました。また、ルクセンブルグの展示会でSTAViの国際デビューができたのは大きな想いがあったからだろうと思います。それ以来大きな事業化の事例は聞くことは少なくなった様に思います。

思い返せば、一緒に事業化に携わった経営者の方々には火傷するくらい熱い想いがありました。世界観も違うし、何より大学の先生とは“こだわり”がひと味もふた味も違いました。とにかく彼らの想いに圧倒されました。

ご存じのようにRISTの事業化で今までヒットした事例は残念ながら多くはありません。競争者が多い世界ではオンリーワンでないと頭一つ抜きんでるのも困難です。彼らがRISTに何を見たかと思いを馳せれば、それは経営者の純粋な想いや夢だったのだろうと思います。では「RISTの役割は何だったのか」と考えると、経営者自身を育成する一種の場（孵卵器）の提供、つまり思いのある経営者を主人公にした熊本劇場だったのではないのでしょうか。これから新しい時代に合ったやり方が求められると思われませんが、私も共に知恵を絞っていきたくと思います。

最後に私とRISTとの関係を考えてみれば、RISTの活動は単なるボランティアではありません。言うまでもなく私自身も事業化テーマの中で成長し、学んだ技術を応用展開してきました。ですからRISTには心より感謝しています。新しい時代へ羽ばたくRISTとなるよう期待しています。